# 楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園

洪　光杓
（東國大學校教授／大韓民國）

## １．序論

記録や現在まで残された遺跡から見て、韓国の庭園は三国時代から造成されたものと見られる。古代に造成されたこれらの庭園はほとんどが水を中心としており、珍しい動物や植物が導入された楽園であった。このような楽園的概念の庭園は統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代を経る過程で継続的に造成されているが、現在まで残された庭園を見ると、宮闕、別墅、士大夫家、寺刹などで等しく造営されたことがわかる。

韓国の庭園が楽園という概念によって説明できる理由は、韓国庭園の追求する場所性が神仙思想を背景とする神秘的な場所[1)]であり、仏教の浄土思想に立脚した極楽浄土[2)]のように人が理想郷的な世界として憧憬する特別な場所であることによる。

韓国では、武陵桃源、栗島、西方極楽浄土などが楽園に通ずる概念として考えられてきた[3)]。これらの理想郷は生の苦痛から解き放ってくれる場であり、完全な秩序を保つ美しい場所であった。したがってすべての人々がこのような理想郷を常に憧憬しつつも現実的にはそれに近づくことができず、庭園を造ることで現実世界からこのような理想郷に近づこうとしたのである。

韓国の古庭園の中でも、新羅王室の東宮に付属する慶州の雁鴨池庭園は神仙思想に基づき造成された楽園であった。この庭園は現存する韓国庭園としては最も古く、規模の面でも単一の庭園としては最大のものである。とくに雁鴨池は屈曲の激しい曲線護岸で形作られ、独特な造営美を誇っている。朝鮮時代に造成された韓国庭園が陰陽五行思想に基づき形成された方形の池塘を中心に形作られたことが一般的であった点を考慮すると、雁鴨池は韓国における苑池の始原を示す貴重な資料と言える。

この研究は、雁鴨池庭園についての理解を通じて韓国の古庭園がどのような形式と内容で構成されていたかを明らかにすべく進められた。雁鴨池庭園を分析するための資料は、主に雁鴨池発掘調査報告書から蒐集し、先行研究結果と現場調査により発掘調査報告書で不足する部分を補った。

## ２．結果および考察

### （１）概観

#### ア．造営時期

『三国史記』巻６新羅本紀第７文武王14年（674）条には「宮内に池を掘り、山を造り、草花を植え珍奇な鳥と動物を飼っていた（宮内穿池造山　種花草　養珍禽奇獸）」という記事がある。また、『東国輿地勝覧』慶州条には「雁鴨池は天柱寺の北側にある。文武王が宮内に池を造り、石を積んで山を造り、巫山十二峰の象徴として草花を植え珍しい鳥を飼っていた。その西側に臨海殿の敷地があるが…（雁鴨池　在天柱寺北　文武王於宮内爲池　積石爲山　象巫山十二峯　種花卉養禽　其西有臨海殿…）」とある。この２つの記事から、雁鴨池が文武王14年（674）に造成された宮園池であることは明らかであり、雁鴨池に臨海殿という殿閣が存在したことがわかる。

一方、雁鴨池の発掘過程で出土した文瓦に「儀鳳四年」と記された銘文があるが、儀鳳４年は唐朝第３代高宗時代の年号で文武王19年（679）に該当し、ま

た「調露二年」と刻まれた塼片が出土しており、この調露2年は文武王20年に該当する。これらを見ると『三国史記』と『東国輿地勝覧』の記事に誤りがないことがわかる。

雁鴨池が造成された当時の時代状況は、新羅が三国の統一を一応成し遂げたものの唐が新羅の地から完全には撤収しておらず、政治、社会的に極めて不安定な時期であった。このような時期に宮内に雁鴨池のような大きな池を掘った目的がどこにあったのかについては、未だ明らかにされていない４)。

イ．名称

『三国史記』や『三国遺事』には雁鴨池という名称が見られない。雁鴨池という名称は『東国輿地勝覧』に初めて確認できるが、『東国輿地勝覧』が1481年に編纂された地理書である点を考慮すると、雁鴨池という名称は15世紀以前につけられたものと見るのが妥当と言えよう。一般的に学者の大半は、雁鴨池の新羅時代の呼称は月池であったと見ている(韓炳参、1982:40、鄭東旿、1986:53－4)。雁鴨池の新羅時代の名称を月池と考える理由は、憲徳王が太子を月池宮に住まわせたとする『三国史記』の記録と、月池に関する職官として月池典と月池嶽典があったという理由による。

雁鴨池という名称については、梅月堂金時習の詩「四遊録」に収録された安夏池旧跡に見られる安夏池が漢字音の似た雁鴨池に換わったとする見解と、朝鮮朝の姜瑋の詩文「十二峯低玉殿荒　碧池依舊雁聲長　莫尋天柱燒香處　野草痕深內佛堂」に見られるように朝鮮時代に入り廃墟となった池に雁と鴨が棲む様子を見て雁鴨池と呼ぶようになったとする見解がある(朴景子、2001:121)。

ウ．思想的背景

雁鴨池には池の中に３つの島がある。これは道教の神仙思想による蓬莱、瀛洲、方丈の三神山と思われる。一方、『東国輿地勝覧』慶州条に見られる「積石爲山　象巫山十二峯」との記録もまた、雁鴨池の造成背景が神仙思想であることを示すものである。

このほかに在来民間信仰としての龍王信仰もまた、雁鴨池造成の背景であった可能性もあるが、これを立証するに足る明らかな記録や遺物は存在しない。ただ雁鴨池の出土遺物である皿、碗、平鉢などの内底面に「辛審龍王」や「龍王辛審」などの文字が大きく陰刻されている点を見ると、雁鴨池で龍王祭を執り行なった可能性は考えられる(朴景子、2001:122－126)。

エ．象徴的意味

『東国輿地勝覧』慶州条に「…西側に臨海殿の敷地があるが…（…其西有臨海殿…)」とした記事の存在を考慮すると、雁鴨池は海(とくに東海[日本海])を象徴する意味を持っていたことがわかる。これらの点から、雁鴨池の中に造成された３つの島が東海に浮かぶ三仙島を象徴するものとして無理なく関連づけることができる。一方、前述した龍王信仰が雁鴨池に介在していた場合、雁鴨池には龍が棲むという神秘性が添えられることになる。

（２）造成形式

ア．空間構成

雁鴨池庭園は池塘である雁鴨池を中心に構成された。雁鴨池は土を掘り出して水を引き、掘り出した土で仮山を築き島が形成されるように造られた人工池であり、その全体範囲は東西200m、南北180mとほぼ方形区域内に造成され、池の全体面積は15,658㎡である。

池は全体的な形態として「Ｌ」字形をなし、自然の地形を利用して直線と曲線が様々な変化を見せつつ調和を保つよう護岸を造成している(高敬姫、1989:21－22)。

池を中心に東側・北側は自然な曲線をなす丘陵として造成されており、西側・南側は建物敷地として造成されており、対照的な景観を見せている[5)]。

池の中には３つの島があり、池を中心に周辺を回遊できるよう動線体系が整えられている。

イ．護岸

池の南岸と東岸は直線で処理し、北岸と東岸は複

雑な曲線で屈曲護岸をなす。護岸は磨いた石を積み上げたもので、護岸の石垣が直線処理された南岸と西岸は、地形上東岸と北岸に比べ約2.5m高く、護岸石垣も東岸と北岸より高く積み上げている。西岸には５つの建物が池に沿って造成されているが、これらの建物の基壇石垣は護岸石垣より池の方向に突き出る形で築造した。

北側と東側の護岸石垣は高さ1.5m前後の曲線石垣となっており、ほぼ垂直に１段で積み上げられている。一方、西側の護岸は直線で処理されており、建物のある場所は高さ1.8m前後の１段石垣、建物のない場所は下層護岸と上層護岸との間の幅が２mとなる上、下2段の石垣となっている。

建物敷地に接する護岸石垣の基壇は水没する部分についてはすべて長さ0.8m～2.3mの自然石を前面のみ磨いて積み上げ、水面上に見える部分の大半には長くて高い長台石（長さ１～２m、高さ55㎝）を磨いて積み上げた。

池の南側護岸はほぼ単調な直線形態となっており、護岸と地面との間は傾斜面とし、その間に奇岩怪石を配置し花や木を植え造景を整えた。

池の護岸石垣の長さは計1,005mで、島の護岸石垣を含むと1,285mに達する。

ウ．島

島は池の中に３つあり、最も大きい島（1,094㎡）は池の南側に長軸を東西にして位置し、中間の大きさの島（596㎡）は大きい島と向き合う池の西北側に位置し、最も小さい島（62㎡）は池の中央からやや南側にずれた位置にある。３つの島はすべて人為的に築造されたもので、高さ1.7m前後に積み上げた石垣の上に土で仮山を築いた。石垣の下には大きな川石を等間隔で配し護岸石垣を支えるようにした。

島には奇岩怪石を配置し珍しい花や木を植え、鳥や動物が棲んでいたことが発掘調査の結果判明している。

エ．峡

東側の護岸には深い海峡のように屈曲した絶妙な峡が３ヵ所見られる。２ヵ所はかなり深く、１ヵ所はさほど深くはない。この峡の際全体にかけて2.1m前後の石垣が約80°の傾斜で積み上げられており、これが山の盛土を保護している。

最も深い峡は北側の護岸に沿って東へ伸びたもので、深さがおよそ90m、峡の入口にあたる池の広さはおよそ30mであり、狭まった場所と広がりのある場所が連続し変化に富んでいる。最も狭い場所が約4.5mとなっており、この峡の周囲の護岸には20余の屈曲が見られる。峡の最深部にあたる場所には舟から降りられるよう４段の階段が護岸に設置されている。東側護岸の中心にある峡は深さがおよそ35m、入口の広さは約14mである。これらに次いでさほど深くない大きく屈曲すると見られる峡があるが、これは池の東側中央に位置し西側から真直ぐ見渡せるようになっている。

オ．半島

東側の山と峡との間に半島が２つある。北側の半島はかなりの大きさで、東側から西側の池の中へ広がりながら横たわっている。この半島は付け根からの長さが65mあり12ヵ所に屈曲が見られ、大きく３つの突出面をなしており、複雑な海岸線のようである。この半島の南側にあるもう１つの半島は池の東側護岸から北側へ向けて30mほど突き出している。護岸には６ヵ所ほど屈曲を加え変化を与えている。

カ．山

雁鴨池の北側護岸の際には東西に約80mの長さを持つ山が３つの峰をなして配されている。山には自然石が配され、深く峻険な山の変化が感じられるよう造成されている。東側の護岸と半島にも山を造り、小さな峰々が連なっている。長い歳月を経て削られた点を考慮すると、現在より高かったことが想像できる。『東国輿地勝覧』などの古文献では、この山を巫山十二峰と記録しているが、山には美しい草花や珍しい動物が棲んでいたと思われる。

キ．入水溝と出水溝

雁鴨池に水を入れる入水施設は池の東南端にあるが、自然石による石構－加工石で作った加工石溝－自然石による水溝施設－２つの石槽施設－小さな池－滝の形状をなす施設という６段階の構成からなっている。ここで特記すべき点は２つの石槽であるが、これは南北５ｍ、東西４ｍの区間に南北の方向に置かれている。南側の石槽は長さ2.4m、幅1.65mの柔らかな曲線からなる亀の形で、石槽の周りを掘り水が溜まるようにし、北側の面に窪みを作り、ここを通る水が40ｃｍほど低い位置に据えられた北側の石槽を満たすように作られている。北側の石槽は長さ2.66m、幅1.65mでこれも亀の形をしており、南側の石槽同様水を抜くための溝を設けた。南北の石槽の両側には長さ2.4m、幅1.2mの大きな板石を置きこれらの板石の外縁に長さ80ｃｍ前後、高さ28ｃｍの外縁石を、屏風を囲むように配置した。滝の形をした施設は、小さな池を通過した水が幅2.5m、高さ70ｃｍの層級石段を通過して３つの板石を利用して作った２段の滝を通って音を響かせながら池に落ちるようになっている。上下の板石の高低差は1.2mである。

出水溝は北側護岸の中間にあり、水位を調節する特殊施設、長台石を積み上げた石溝、木製の水溝、長台石の石溝など４段階で構成されている。特殊施設は、護岸石垣面に合わせ長さ1.5m、高さ0.3mの長台石を２段に積み上げ、１段と２段とをつなぐ部分に直径15ｃｍの穴を開け、そこに木材の蓋を差し込んだものだった。また、2段の長台石のうち上部長台石の上面には幅15㎝、長さ１m、深さ１㎝の凹部の上に碑座形の何からの部材を置いたものと推測される。

ク．植物と動物

雁鴨池の半島と島には種類も様々な珍しい草花と動物が棲んでいたとされる。『三国史記』文武王14年の記事からは、雁鴨池の島に植えられたものは灌木類や草花類であったと見られる。これは大木を植えると山の形や奇岩怪石を眺めることが出来なくなるためによる。このとき雁鴨池に導入された草花類は真平王の時代に新羅に輸入された牡丹や菊、蘭、クチナシ、香草、ツツジ、ザクロ、サンシュユなどの類と推定される（鄭在鑣、1996:56）。

一方、発掘調査の過程でガチョウ、鴨、山羊、鹿、豚、馬、犬の骨が出土し、当時雁鴨池に棲んだ動物についても想像することができる。

（３）考察

ア．楽園としての概念

雁鴨池は楽園としての性格を示している。これは、池の中にある３つの島が三神山を意味すると見られる点と、『東国輿地勝覧』慶州条に記述のある「雁鴨池に石を積んで山を造り巫山十二峰の象徴とし、草花を植え珍しい鳥を飼っていた」とする記事による。

雁鴨池の中に造成された３つの島は三神山を象徴するものと見られる。これは『三国史記』にある、百済の武王が634年扶余の宮南に池を掘り池の中に方丈仙山を模したとする記事から見て、雁鴨池に造成された三神山が即ち三神山説話に登場する蓬莱山、方丈山、瀛洲山のうちの１つと類推させるものである。一方、三国時代には花郎を国仙とも呼び、仙郎、神仙、仙または仙風とも呼称したが、これは神仙思想に根付くものである。これを見ると雁鴨池造成当時、韓国固有の神仙思想も流行したことがわかる。このような側面から、雁鴨池の３つの島への神仙思想の取り入れも大きな無理はなかったと考えられる。

『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰は、中国の戦国時代、楚の襄王が冀州の雲夢で仙女と逍遥したとする古事に由来する。『古文真宝』前集七巻に記載された李太白の観元丹丘坐巫山屏風詩の註釈では、十二峰の呼称を望霞、翠屏、朝雲、松巒、集仙、聚鶴、浄壇、上昇、超雲、飛鳳、登龍、聖泉とした。一方679年に建立した東宮・正殿の名称は臨海殿といい、哀荘王5年（804）に東宮内に万寿房を建てた。『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰や臨海殿、万寿房

などは神仙思想に関わりのある名称である(文化財管理局、1978:377)。このような点から、雁鴨池が神仙思想に基づき造成された庭園であることは明らかであり、このような神仙思想が楽園という理想郷的な世界と相通ずるものであることが理解できる。

イ．雁鴨池造成のモチーフ

雁鴨池が造成される当時において新羅では東向重視思想が流行していた。その証拠としては、脱解王を東岳の神として推仰したこと、石窟庵本尊仏の方向を文武大王陵のある東海口側に向けて配置したことなどが挙げられる。新羅人たちにとって吐含山の向こう側にある東海は護国の源となる地であった。とくに東海口は海水と真水が出会う地点であり、海岸線の構造が複雑なリアス式海岸となっている。

雁鴨池が造成された東宮の主殿が臨海殿という名称を名乗っている点は、海に面する建物であるという象徴性を具体的に示すものである。この点から見て雁鴨池は、海を表現したものであり、とくに文武大王の水中陵のある東海口をモチーフにしたものと考えられる。

ウ．雁鴨池前後の韓国庭園

文献上の記録や遺跡、遺物から見て、新羅時代に造成された庭園は雁鴨池が最初のものである。一方、百済時代に既に庭園が造られたとする記録もいくつか見られる。『三国史記』巻第25「百済本紀」第3辰斯王7年(391)条には「正月に宮室を改修し池を掘って山を築き、珍奇な動物や草花を育てた(春正月　重修宮室　穿池造山　以養奇禽異卉)」とする記事があり、『三国史記』巻第26「百済本紀」第4東城王22年(500)条には「春に宮の東側に臨流閣を建てたが、高さが丈であった。さらに池を掘って珍奇な飛禽たちを飼った(春　起臨流閣於宮東　高五丈　又穿池養奇禽)」という記事があり、『三国史記』巻第27「百済本紀」第5武王35年(634)条には「3月に宮の南側に池を掘り、水を20余里にわたり引き入れ、池の端の4つの丘に柳を植え、池の中に島を造り方丈仙山を模した(三月　穿池於宮南　引水二十餘里　四岸植以楊柳　水中築島嶼　擬方丈仙山)」という内容の記事がある。これを見ると百済の方が新羅に比べて庭園造成の歴史が古いことがわかる。

雁鴨池が造成された時点が、新羅が百済と高句麗を滅ぼし三国を統一した直後であった点を考慮すると、雁鴨池の造成に百済人が動員された可能性は充分考えられる。したがって歴史的に見て、雁鴨池は百済の庭園技術に基づいて造られた可能性が極めて高い。

一方、『日本書紀』推古天皇20年条(612)には「百済から帰化した路子工が宮室の南側の庭に須彌山を作り呉橋を架けた」との記録がある(金龍基、1996:406より再引用)。これらの記録を見ると百済の庭園造成の技法が日本にまで影響を及ぼしたと思われ、新羅の東宮園池である雁鴨池庭園と日本の古代庭園が多くの面で類似性を持つ可能性を示唆している。

雁鴨池の造成以降、統一新羅時代に造られた龍江洞園池(嶺南文化財研究院、2001)と九黄洞園池(国立慶州文化財研究所、2008)は雁鴨池と同じく曲線護岸からなり、池の中に島を配しており(龍江洞園池は南北に2島、九黄洞園池は大小2島)雁鴨池と類似の形式であることが確認できる。これらの点から、雁鴨池と類似の形式を持つ池が庭園の中心に配されることが当時としては一般的な傾向であったと思われる。

新羅時代以後高麗時代、朝鮮時代を経ながら、宮闕をはじめとする数多くの場所に庭園が造成され、現在まで多くの庭園が残されている。これらの現存する庭園遺跡を注意深く観察すると、朝鮮時代の韓国庭園は陰陽五行説に基づく円島方池を中心に配して庭園を造成した傾向が見てとれる。庭園の中心となるこれらの円島方池は宮闕のみならず別墅、士大夫庭園などに例外なく見られ、雁鴨池のような形式を持つ池を見つけることが困難となる。この点から見て、朝鮮時代へ移行する過程で韓国庭園には雁鴨池のような池塘様式がそれ以上伝承されなかったと考えられるが、その理由は分からない。

## ３．結論

雁鴨池庭園は統一新羅時代に造成された雁鴨池を中心に形成された韓国の古庭園である。雁鴨池は直線と曲線の護岸が神秘的な調和をなしており、池の中には３つの島があり三神島を象徴している。雁鴨池の東側と北側には山を造り奇岩怪石を用いて視覚的効果を高めているが、これは巫山十二峰を象徴するものと思われる。

雁鴨池の楽園としての象徴性は、やはり３つの島と巫山十二峰の存在によるものである。三神山と巫山十二峰は道教的概念の神仙思想に基づき形成されるものであり、神仙思想は現実世界では到達しえない神秘的な場所性を持つ。このような神仙思想が雁鴨池造成の背景にあったならば、雁鴨池が楽園としての象徴性を持つことに疑いの余地がないと思われる。

雁鴨池造成のモチーフはやはり東海であったと見るのが妥当である。東海の中でも、とくに東海口は新羅人にとっては聖なる地であった。このような聖なる地を常日頃訪ねて身近に感じることを新羅人は願望として夢見たであろう。

雁鴨池が造成されて以降、統一新羅時代に龍江洞園池と九黄洞園池に、雁鴨池と類似の屈曲の激しい曲線形の池塘が造成されたものの、高麗、朝鮮時代を経る過程で韓国の庭園は陰陽五行思想に立脚した円島方池を中心に造園することが一般的となり、これ以降雁鴨池の造成様式の伝承はなかったと思われる。ただ、日本庭園の池塘様式との類似性を見ることができ、造園様式が日本へいかに伝えられたのか注目されるところである。

この研究は雁鴨池に対する概括的な内容と造成形式を取りあげ、いくつかの重要な論点について考察した。今後、韓、中、日の３国において庭園についての比較研究が進めば、３国間の庭園様式の交流についての理解が深まるものと期待される。

註

1)三神山や巫山十二峰に代表される。

2)韓国で浄土思想に基づき造成された庭園としては、仏国寺の九品蓮池をはじめとする庭園が代表的なものである。『仏国寺古今創記』には「嘉慶三年戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録があり、九品蓮池が浄土の象徴である蓮花を飾る皿としての機能を果たしていたことが確認できる。九品蓮池は浄土信仰の九品蓮台に由来する名称であり、浄土に往生する者が座った9種類の蓮花台が即ち九品蓮台である。九品蓮池は1970年代の仏国寺復元のための発掘調査の過程でその姿を現した。発掘調査の結果、九品蓮池は青雲橋と白雲橋の南側の泛影楼付近に位置し、東西長軸39.5m、南北長軸25.5m、深さ2～3mほどの蓮池であり、池の周囲には巨大な石が積み上げられていたという。九品蓮池や極楽殿へ登る蓮花橋、七宝橋は、互いに意味的なつながりを持つ。つまり蓮花橋は九品蓮台の中上品である蓮花台を意味する名称であり、七宝橋は中中品である七宝蓮台を意味する名称である。九品蓮池が蓮花橋と七宝橋そして安養門と極楽殿の前面部に造成されたことは、九品蓮池が極楽浄土へと進む過程であることを象徴的に表現するひとつの手段となるものであり、これら諸々の状況から見て九品蓮池が浄土庭園であることが確認できる。仏国寺に造成された浄土庭園-九品蓮池は、未だ復元されることなく土の中にその姿をとどめている。一日も早く完全な発掘を行ってその全貌を明らかにし、速やかに復元して韓国的概念の浄土庭園との出会いを実現すべきである。

なお、仏国寺の九品蓮池に関する内容については、参考文献11（※本報告書巻末の参考資料に日本語訳を掲載した。）を参照されたい。

3)西洋人はユートピア(Utopia)、シャングリラ(Shangrila)、エルドラド（El Dorado)のような場所を理想郷と考えてきた。

4)新羅が三国間の覇権争いで百済を滅ぼした時期は太宗武烈王7年(660)、高句麗を滅ぼした時期は文武王8年(668)、唐を新羅の地から完全に逐い出した時期は文武王16年(676)である。

5)発掘調査の結果、雁鴨池の西側に全5ヵ所の建物跡が確認された(文化財管理局、1978)。

参考文献


1)高敬姫, 1989, 雁鴨池, 대원사

2)國立慶州文化財研究所, 2008, 慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館建立敷地內遺蹟－九黃洞園池遺蹟

3)金富軾, 1145, 三國史記；李丙燾譯註, 1983, 三國史記 上・下, 乙酉文化社

4)金龍基, 1996；韓國造景學會, 東洋造景史, 文運堂

5)文化財管理局, 1978, 雁鴨池發掘調査報告書

6)朴景子, 2001, 雁鴨池 造營計劃研究, 學研文化社

7)嶺南文化財研究院, 2001, 慶州龍江洞園池遺蹟, 學術調査報告 30冊

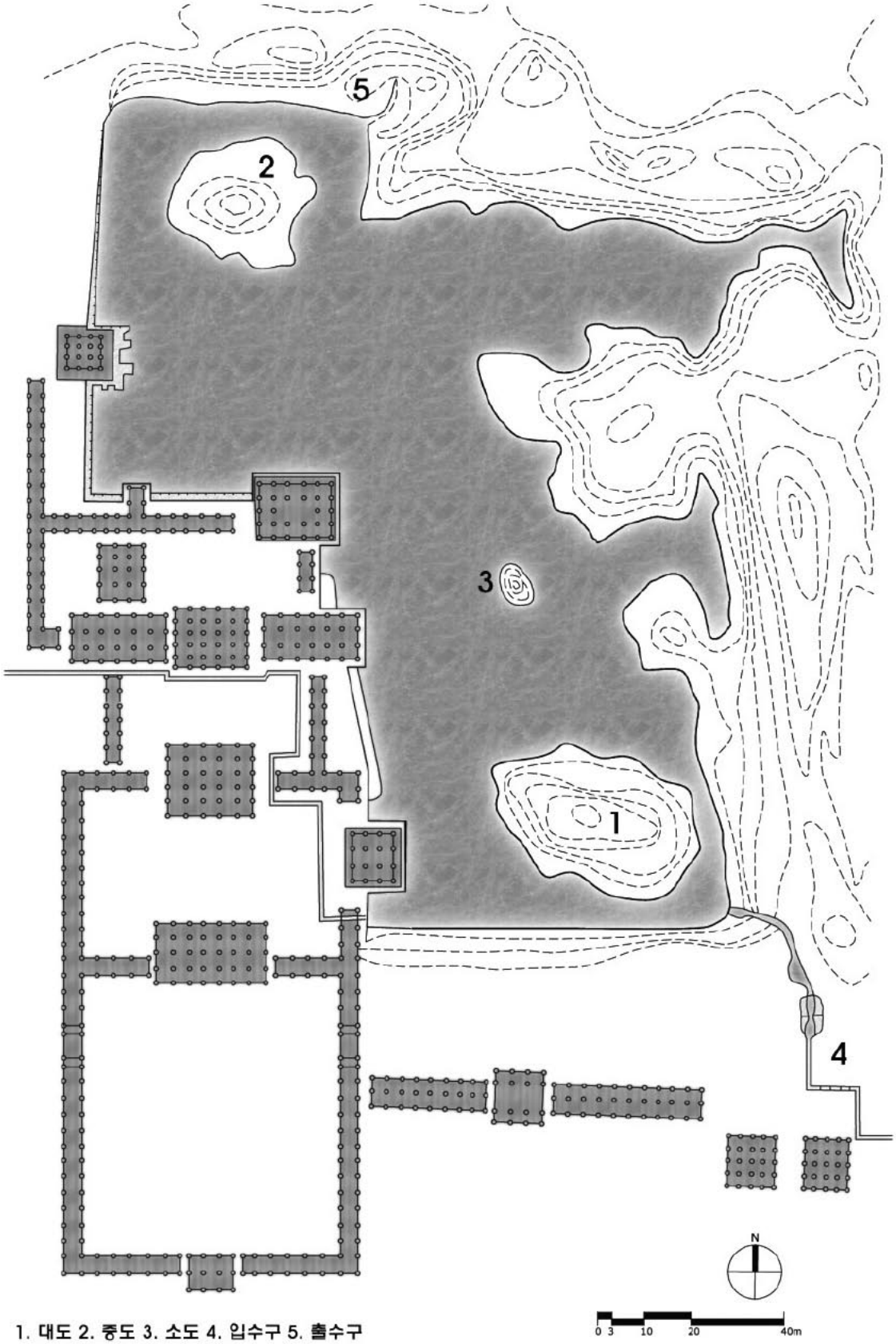
8)鄭瞳旿, 1986, 韓國의 庭園, 民音社

9)鄭在鑣, 1996, 韓國 傳統의 苑, 圖書出版 造景

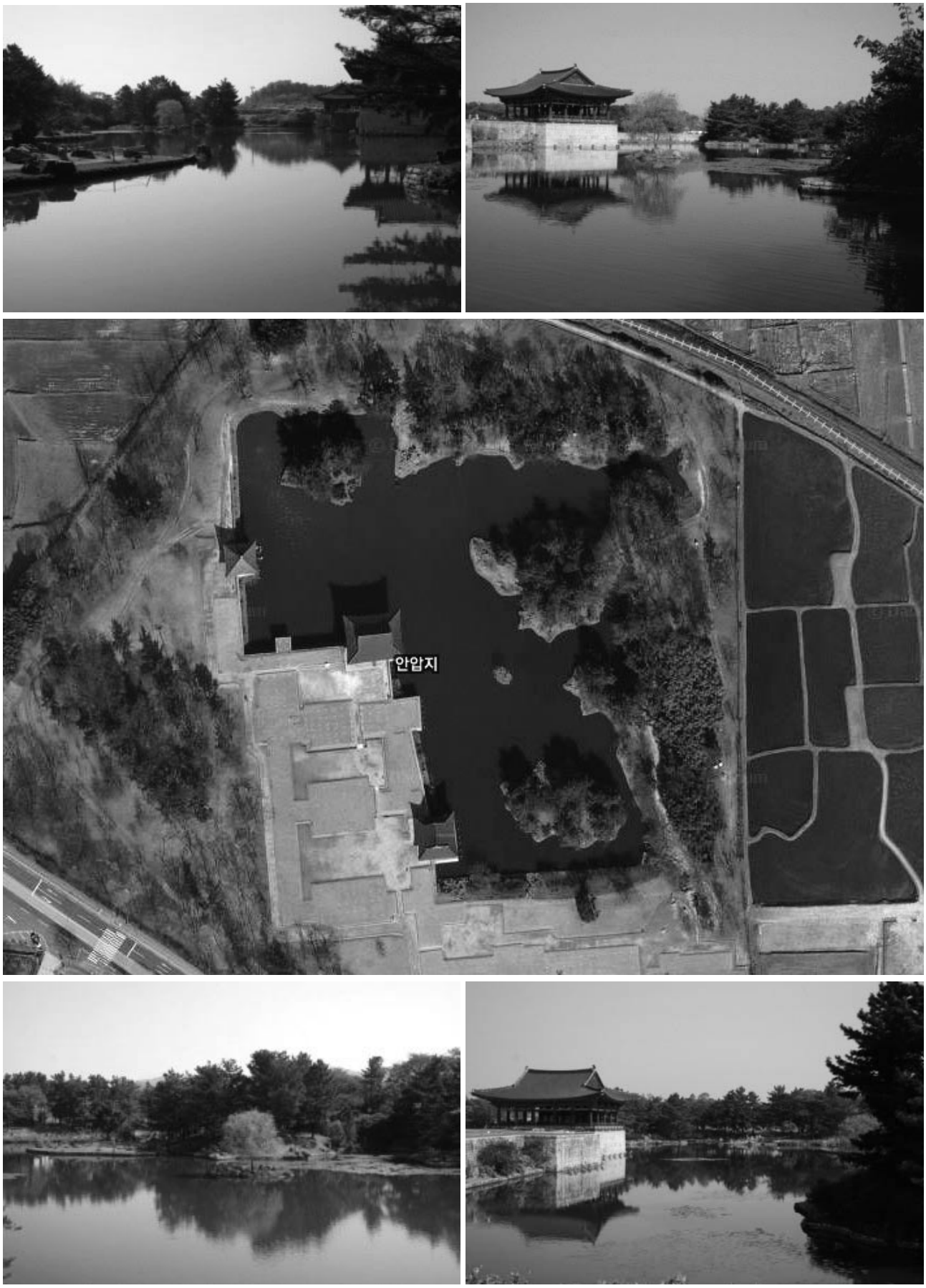
10)韓炳三, 1982, 雁鴨池 名稱에 대하여, 考古美術 153

11)洪光杓, 1994 , 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韓國庭園學會誌 12(2), p.p.75－82

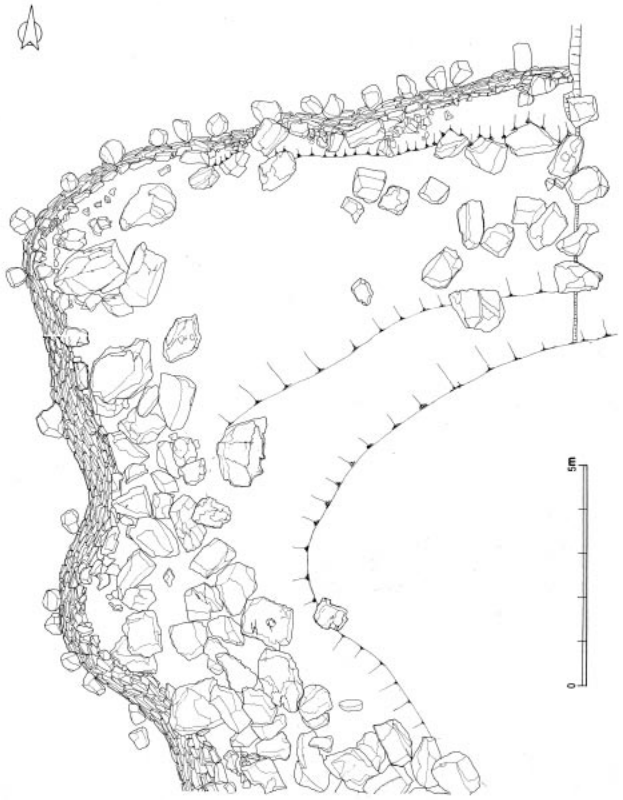
12)洪光杓・李相潤, 2001, 韓國의 傳統造景, 東國大 出版部



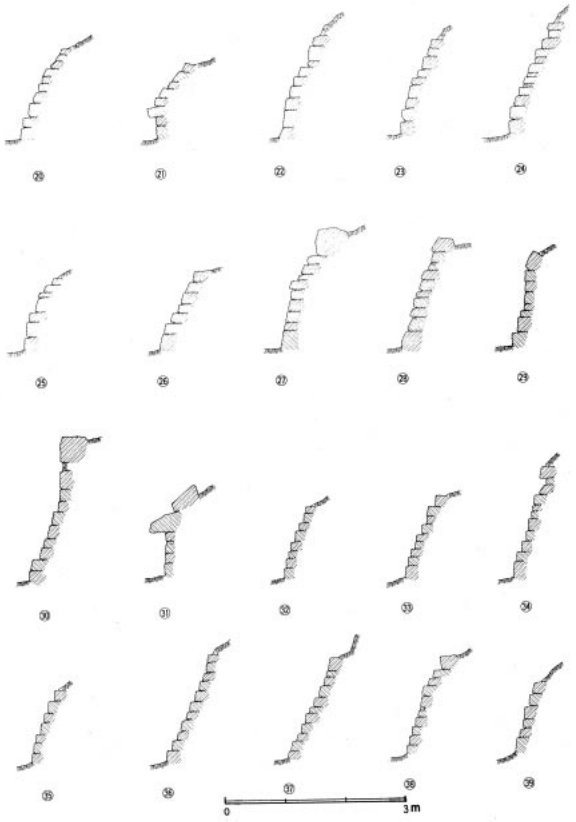

図－１　雁鴨池の配置平面図
（1. 大島　2. 中島　3. 小島　4. 入水溝　5. 出水溝　）



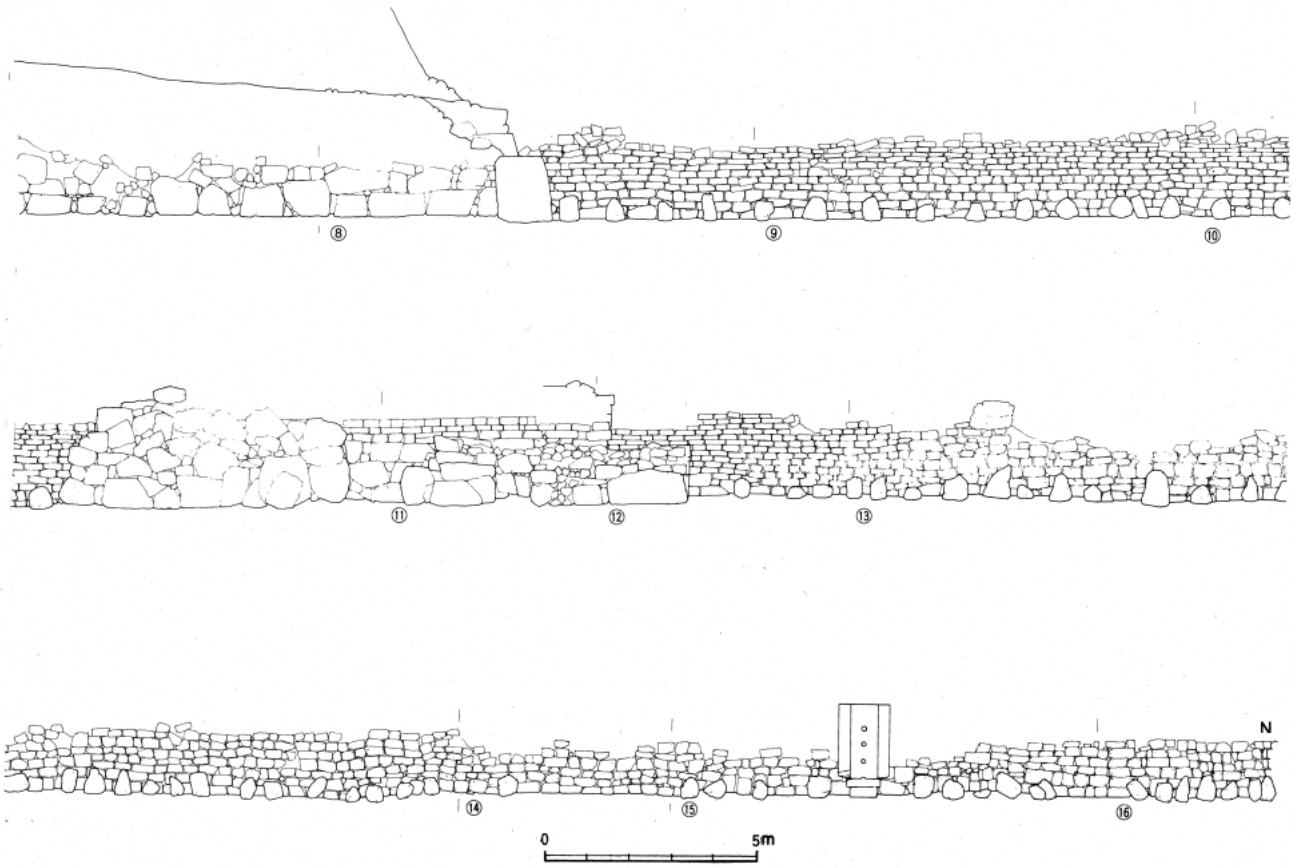

図－２　雁鴨池　衛星写真（中央）と現在の風致景観



図－３　雁鴨池　護岸発掘平面図

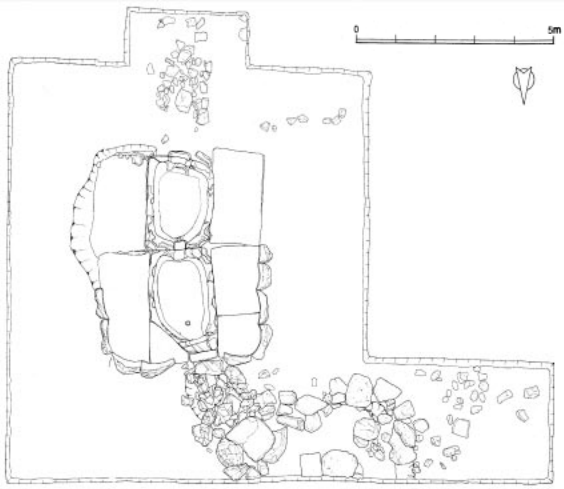


図－５　雁鴨池　護岸石垣断面図



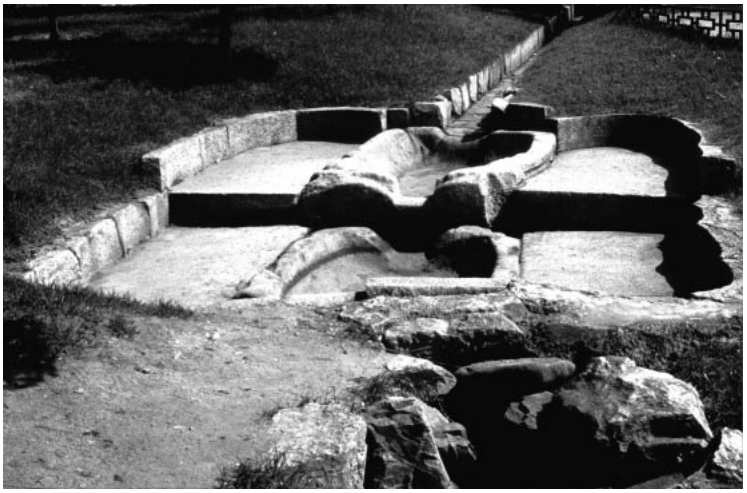

図－４　雁鴨池　護岸石垣立面図

※本頁の図版は、参考文献５による。

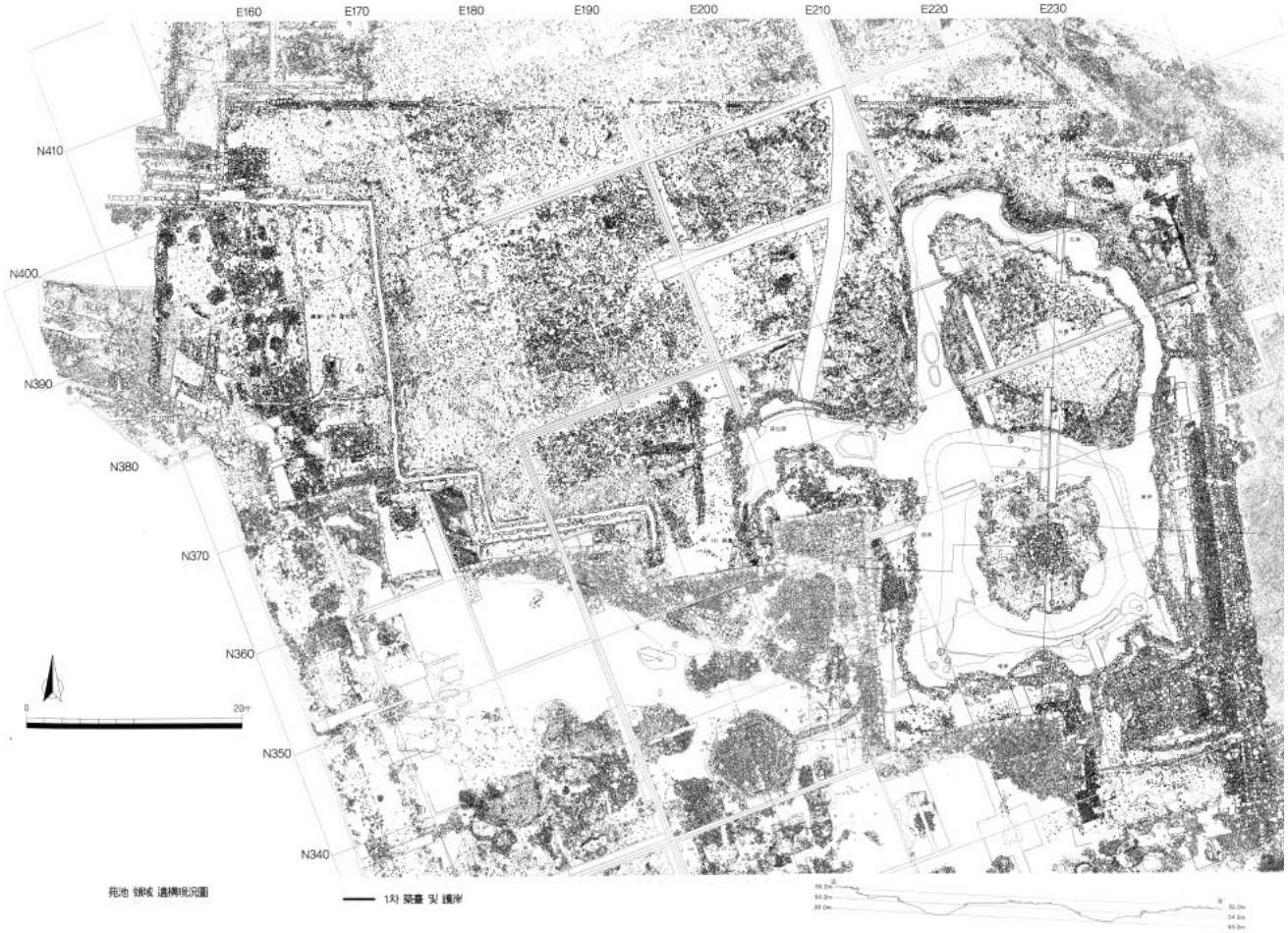



図－６　雁鴨池　石槽の発掘平面図

※参考文献５による。



図－７　雁鴨池　入水溝の石槽

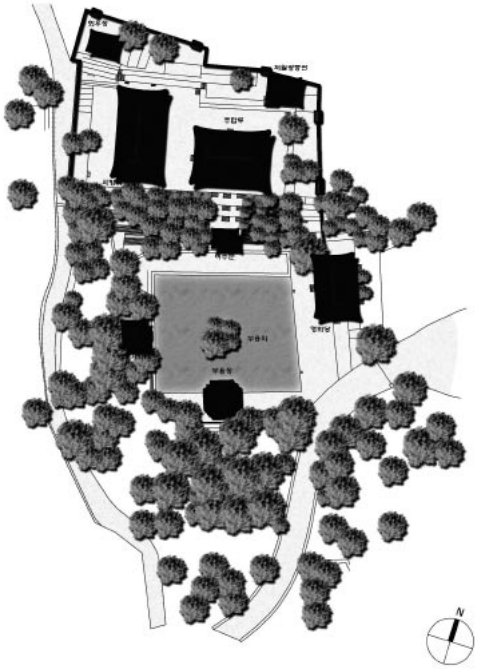



図－８　九黄洞園池遺跡　発掘平面図

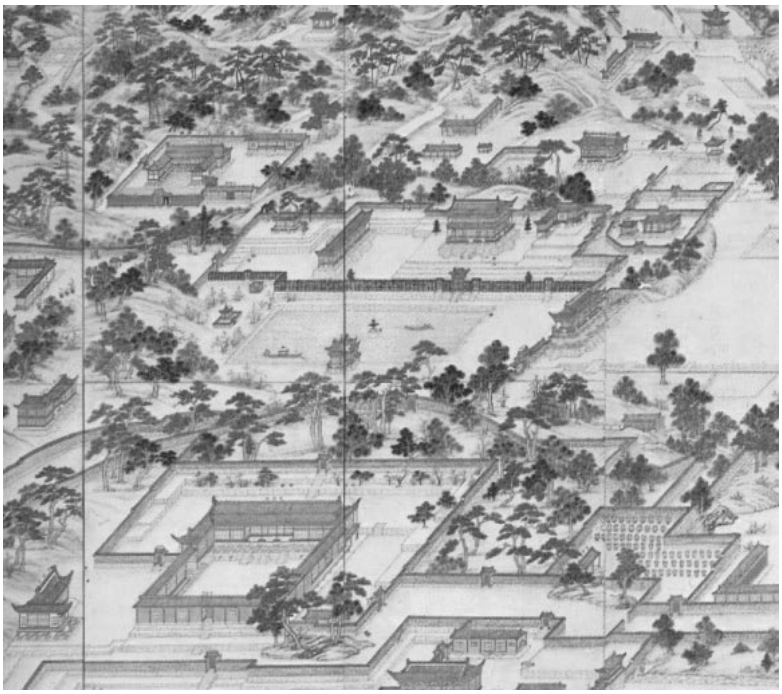
※参考文献２による。

図－９　龍江洞園池遺跡　発掘平面図

※参考文献７による。



図－10　昌徳宮芙蓉池の周辺配置図



図－11　昌徳宮芙蓉池の周辺図（東闕図）